講演会

日本とトルコで大使館が開かれるまで
―近代外交システムの拡大と日本とトルコの常駐在外公館網の発展―

東京大学名誉教授　鈴　木　　董

司会　開会に先立ちまして、メリチ駐日トルコ共和国大使から一言御挨拶いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

メリチ大使　鈴木先生、高橋館長、皆様、こんにちは。きょうは鈴木先生のレクチャーを機会に皆様とお会いできて、とても嬉しいです。

今年と来年は、トルコと日本の関係において節目の年になっています。今年は国交樹立九〇周年です。また、来年は軍艦エルトゥールル号の遭難一二五周年です。

現在、トルコと日本の間は大変よい友好関係にあります。実は、この友好関係は今だけではなくて、大変古い歴史があります。アブデュル・ハミト二世が一八九〇年に明治天皇に親書を送り、エルトゥールル号を日本に派遣しました。エルトゥールル号が任務を終えて帰国の途についてほどなく、台風に遭ってしまいました。串本の大島の前で沈没したこの事故によって五〇〇人以上の者が殉難しました。しかし六九人が串本の人々に救助されました。それ以来、日本の皆様が亡くなった将兵の思いを大切にしてくださっています。トルコの国民は日本のこの寛大さを心に刻み、忘れることがありません。皆さん、これが一世紀を超える両国民の友情の礎になっています。

この友情の上に、今から九〇年前にトルコと日本の間で国交が樹立されました。そして、若いトルコ共和国と日本の友好関係が互いに設立された大使館をもって、着実に増進されていくことになります。

皆様、九〇年前の世界を考えてみてください。全世界で何カ所に日本の大使館があったと思いますか。今みたいに万国で大使館を持っていた時代ではなかった。各国が主要国にだけ持っていました。その時代から、トルコと日本はお互いを重視し、大使館を設置したわけです。

この貴重な歴史について、五月より外交史料館別館で開催中の展示で、貴重な史料が展示されています。そして、きょうは鈴木先生にこの歴史について講演いただけるとのうれしい機会もあって、誇りに思

います。企画実施に尽力くださいました皆様に感謝を申し上げます。

鈴木先生は、トルコの歴史界で大先生です。先生はその功績をたたえられ、先月、トルコ共和国大統領府の勲章を授与されました。この場をかりて、先生に敬意を表します。先生、受章、おめでとうございます。

本日は、実のあるよい講演会になりますことを祈念し、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

司会　メリチ大使、ありがとうございました。では、講演に移りたいと思います。鈴木先生、どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

ただいま御紹介にあずかりました鈴木です。ちょうど本年は日本とトルコの国交樹立九〇周年、来年が日本とトルコにそれぞれの大使館が実際に開かれてから九〇周年になります。そして、来年はまた、オスマン朝第三四代スルタンのアブドュル・ハミト二世が明治天皇宛の親書を託してエルトゥールル号を派遣し、そのエルトゥールル号が遭難してから一二五年目ということで、今年から来年にかけていろいろな日本・トルコ関係の企画があるかと存じます。

特に国交樹立といった問題については、日本で一番重要な公的機関というと、やはり外務省の外交史料館なので、昨年展示会の開催について御相談に伺いましたところ、快く前向きに検討してくださり、立派な形で貴重な史料を展示していただきました。まだ御覧になっておられない方は、この講演の後に是非御覧ください。非常に貴重な、明治天皇の御名御璽があるような文書も展示されています。

本日は、「日本とトルコで大使館が開かれるまで―近代外交システムの拡大と日本とトルコの常駐在外公館網の発展―」という題目でお話しさせていただきます。近代西欧が原動力となって近代外交システムが世界中に広がり、そのネットワークのもとで全地球が一つになったグローバル・システムが成り立っていくという流れの中で、トルコが、オスマン帝国時代からトルコ共和国時代にかけて、どのような形でそのシステムに参入し、そして自らの外交網を広げていったのかという物語が一方にあります。他方、日本でも、幕末に諸外国が在外使臣を江戸に置くようになり、明治維新以降には日本の常駐の在外使臣を世界中に広げていくという物語が展開します。そして日本とトルコの公式の出会いが起こったのが、ちょうど九〇年前です。その一年後には大使館が開かれることになりました。それが、お互いの近代外交システムへの参入と、その中での発展過程でどのような意味を持ったのかということについて考えたいと思います。その際に、外交文書を多用して、微視的に国交樹立、大使館開設の事情について論ずるというよりは、もう少し広い巨視的な視角、ある意味では文明史的視角から、両国の大使館が開かれるようになった経緯について見てみたいと

存じます。

なお、詳しい経緯につきましては、古くは内藤智秀先生の『日土交渉史』（泉書院、一九三一年）という本が戦前に出ておりますし、戦後は外務省でも有数のトルコ通でいらした松谷浩尚さんが『日本とトルコ―日本トルコ関係史―』（中東調査会、一九八六年）という御著書を出しておられますので、こちらも御覧ください。

一　近代外交システムの形成と諸文化世界

まず、大きな枠組みとして、「近代外交システムの形成と諸文化世界」というところから始めさせていただきます。御承知のように、現在は地球上の全ての人類社会が一つのシステムの中に組み入れられて、唯一のグローバル・システムができ上がっています。これについてアメリカのウォーラースティンは、独特の意味で「近代世界体系」という言葉を使っていますが、今回はそれよりはもっとソフトに、近代に入って全地球が一つのシステムにまとめられたというような、非常にやわらかい意味で近代世界体系と呼びます。その近代世界体系形成の原動力は、やはり何と言っても西欧人たちであったと言っていいでしょう。

鈴木　董　名誉教授

この、全地球をまとめる唯一のグローバル・システムとしての近代世界体系が形成されていく端緒は、一五世紀末に始まる西欧人の「大航海時代」であったと考えられます。それまで十分に使われていたのは、三大洋のうちでインド洋だけで、太平洋と大西洋はほんの沿岸部だけが使われていたに過ぎません。それが、「大航海時代」を通じて、太平洋、大西洋も縦横に使われるようになりました。そして、アジア、アフリカ、ヨーロッパからなる、いわゆる「旧大陸」の人間から見れば、未知であった南北アメリカ大陸との出会いを経て、三大洋五大陸をつなげるネットワークができていったのです。

このネットワークは一七、一八世紀を通じて次第に踏みならされた道となり、ネットワークからグローバル・システムへと発展しました。これも近代西欧がベースとなって展開していきました。

では、全地球が一つのネットワーク、さらには一つのシステムの中に位置づけられるようになる以前の世界について見渡すとどうであったかということをお話しします。

文字の使用分布によって広がりを見ることができる世界を文字世界と名付けると、独自の文化を持った複数の文字世界が並び立っていたと言えます。とりわけ「旧世界」、この言葉にはいろいろと語弊があるそうですが、他に上手い言い方がないので、ここでは「いわゆる」という意味の括弧付きで「旧世界」や「新世界」という言葉を使いますが、「旧世界」の三大陸、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸を大きく見ますと、独自の文字を使って、その広がりが文字の分布で

わかるような独自の文化を持った五つの世界が並立していました。

まず、西の端にはラテン文字世界がありました。これは西欧キリスト教世界、カトリック・プロテスタント世界とも言えますが、ラテン文字を使う世界だと捉えれば、可視的に理解できます。共通語として重要なのはラテン語で、それをラテン文字で綴るのです。西欧諸国の植民地や近代化の過程でラテン文字を使用し始めた地域は別として、元来、一五世紀あたりまでラテン文字が使われていたところが本来のラテン文字世界です。

ラテン文字世界の隣にはギリシア・キリル文字世界がありました。これは現代でいえば、実質的には東欧正教世界です。正教の教典である聖書はギリシア語の原典または教会スラブ語訳で読むのですが、ギリシア人たちはギリシア文字を使い、それ以外の人々は、ルーマニア人も含めてキリル文字を使っていました。ルーマニア人は後に近代西欧の影響が強くなって、キリル文字に替えてラテン文字を使うようになったものの、全体としてはギリシア・キリル文字世界とまとめることができると思います。

東の端には漢字世界がありました。共通の古典語が漢文であって、漢字を常用しているか、あるいは少なくとも漢語が多量に浸透している世界です。中国を中心にして、朝鮮半島、ヴェトナム、日本そして沖縄、この五社会が漢字世界を形成していました。

その西隣には、梵字系の言葉、ブラーフミー文字系の文字を使っている世界があって、インドを中心とするヒンドゥー文化が広がっていました。東南アジアの場合は、初めはヒンドゥー教も入っていて、後に上座部仏教が根づきますが、やはりパーリ語の仏典を読んでおり、ラオス、カンボジア、タイ、ビルマと、全て梵字系の文字が使われています。つまり梵字世界であると言っていいでしょう。

この四つの文字世界の全てに接する形で、アジア、アフリカ、ヨーロッパの三大陸をつなぐ地帯に、東西南北に広がっていたのがアラビア文字世界です。これをイスラム世界と名付けてしまうと、イスラムばかりではないという異論も出ます。しかしながら、もっとも支配的な文字表示に使われるのがアラビア文字であることは確かです。共通の文化、文明語がアラビア語であって、アラビア語の語彙が大量に入っています。

例えば、梵字世界の中心であるインドの第一国語であるヒンディー語と、それからパキスタンの公用語であるウルドゥー語は、文法的にはほとんど同じ言語ですが、ヒンディー語はデーヴァナーガリー文字を使って、ウルドゥー語はアラビア文字を使って綴られるのです。語彙的には、ヒンディー語の場合にはサンスクリット系の語彙が主をなしているのに対して、ウルドゥー語の場合はアラビア語の語彙字が非常に多く入っているということから、アラビア文字世界に入れてもおかしくはないでしょう。

おのおのの文字世界は、イメージと現実を合わせた独自の世界秩序と、その中に、独自の政治単位の在り方を持っていました。そしてそれぞれ文字世界としての独自の文化を持った各世界は、お互い交流は

ありますが、相対的な自己完結性を保って並立していたと思われます。

このように自己完結性を持って並立していた各世界でしたが、一八世紀から一九世紀にかけて、徐々に自己完結性がほどけてまいります。ほどけていく中で唯一のグローバル・システムとしての近代世界体系を組み上げる原動力となったのはラテン文字世界としての西欧世界であり、その世界秩序についての理念や、政治単位の在り方についての理念といったものがだんだんと受け入れられるようになり、その結果として、近代西欧モデルがワールド・スタンダードになっていったのです。

ここで、外交という言葉の定義をはっきりさせておきます。このお話の中では、「政治単位」間の関係を外交と呼ぶことにしたいと思います。国家という言葉をあまり使いたくない理由は、国家 (State) というと我々はどうしても近代国家を念頭に置いてしまうためです。ここでいう外交の主体は、それとは全く違うものも含んでいるのです。例えば、前近代の中華帝国とか、あるいはオスマン朝やアッバース朝のようなイスラム帝国というのは、近代国家とはまったく性質が異なります。そこで、ポリティカル・ユニット (Political Unit) という言葉を使えば、そういういろいろな雑念が入りにくいところがあるので、あえて「政治単位」と言わせていただきます。その政治単位間関係としての外交とそのルールにおいては、新しく全地球が一つにまとめられて形成されてきた近代世界体系では、近代西欧で成立したモデルがワールド・スタンダードになっていました。

現代において、国際法として世界中の人々が従わなければいけないルールだと一応考えているのは、近代西欧国際法概念から発達した近代国際法でしょう。この考え方に対して異論が沸き上がってくることももちろん承知していますが、実際上、諸国間でルールとして遵守されているのは近代国際法であるという前提で話を進めます。

近代西欧が原動力になって、全地球が一つのグローバル・システムとして統合されていく過程で、グローバルな近代外交システムができる。しかも、そこではルールと外交の在り方のモデルは、近代西欧で完成されたモデルが元になっているのです。そういう中で、諸文化世界はだんだんとそのシステムに包摂されて、文化的な体系およびその独自性は保ちながらも、しかし次第に自己完結性は失って、世界から圏へと移っていったと言えます。

ただし文化として残っているのは確かで、漢字圏の場合、例えば箸で物を食べるという習慣があって、これは世界的に見て極めて特異な物の食べ方です。指の延長の在り方としてフォークとナイフが一方にあって、他方で箸があって、箸はもともと、漢字圏でしか使われていなかったわけです。漢字圏の文化がだんだんグローバル化して、西欧でも寿司を食べるのが流行すると、通（つう）は箸で食べる。もっと通は、指で食べる。かつて立川談志師匠がラジオで、「寿司を食うときぐらいは指で食ってもらいてぇね」と言っていました。通になるとそういうことがありますが、文化の違いは食の作法といったところでも厳然と残っているように思います。

このような大きなグローバル・システムの枠組みに、トルコ共和国とその前身であるオスマン帝国を政治単位として位置づけ、オスマン帝国からトルコ共和国に変遷する過程において、その外交網がどう広がって日本と出会うことになったかということにお話を移したいと思います。

二　トルコ共和国の前身、オスマン帝国とイスラム世界秩序

イスラム世界というのは、このごろマスコミ等でもよく取上げられるようになりました。しかし、イスラム教徒は日本では非常に少ないし、イスラム世界についての情報も、例えばヨーロッパや中国に関する情報に比べて非常に少ないというところがあって、一般には依然としてあまり馴染みのない世界であると思われます。

トルコ共和国は、歴史的にはもちろんオスマン帝国の後身ですが、同時に法秩序の面からもオスマン帝国の後身であると言えます。オスマン帝国というのは、トルコ系のムスリムが、当時のイスラム世界の西北のフロンティアであったアナトリアの西北部で立ち上げ、一三世紀の末から一九二二年まで存続していた国家です。

ただ、この国家はトルコ系のムスリムが立ち上げたけれども、これが次第に拡大していく間に様々な言語、民族に属する人たちを包摂して、トルコ民族国家というよりは、イスラムの多数派であるスンナ派によるイスラム的世界帝国というべき色彩を帯びていったのです。それは、満州人の建国した清朝が次第に中国的な文化の世界になじんでいく中で、満州民族国家ではなくて、中華的な世界秩序観に基づく世界帝国となっていったということと対比して考えていただければよろしいでしょう。

そこでの世界秩序の在り方というものも、基本的にはアラビア文字世界としてのイスラム世界の世界秩序観念を基礎にしていたといえます。イスラム的世界秩序において、人間は信心者と不信心者の二つに分かれます。唯一神アッラーの最後の御使い、預言者ムハンマドが伝えた神の言葉に従って生きることを誓い神と契約した人たちが信心者であり、それらの人々のみが真の信心者であるイスラム教徒、ムスリムである。それ以外の者は不信心者であるとされました。

ただし、不信心者にも二種類あって、キリスト教徒やユダヤ教徒のような一神教徒は同じアッラーを奉じながら、より古い御使いの伝えた教えを保っている人たちであり、偶像崇拝者こそが本当の不信心者であるというように人間を分けています。そして世界も、イスラムを奉じ、預言者ムハンマドを通じて伝えられた唯一神アッラーの最後の教えを奉ずる人々が支配し神の教えが十全に行われている世界と、まだ異教徒の支配下にあって、アッラーの最終の教えが十全に行われていない世界からなると捉えています。

前者、すなわちイスラム教徒が支配し、ムハンマドを通じて伝えられた神の教えが十全に行われているところは、「イスラムの家（ダール・アル・イスラーム）」と呼ばれています。それに対して、まだ異教徒

たちが支配していて、神の最終的な教えが十分に実現されていないところは、「戦争の家（ダール・アル・ハルブ）」と呼ばれています。この二つから世界は成っていると考えられているわけです。

両者の関係としては、和戦両様、説得によっても、あるいは戦いによることもありますが、ムスリム側の和戦両様の熱烈な努力により、「戦争の家」は後々に「イスラムの家」へと包摂されていくべきものと考えられていました。この努力をジハードといいますが、歴史的に見ると、イスラム世界が形成されて拡大していった過程では、武力によるジハードが非常に大きな役割を果たしたのは確かです。そこで、正義の戦争というのは武力によるジハードしかないと捉えられていました。そういう観念が出て来うるのは、イスラムが理念上、単一の指導者をいただく単一の政治体であるべきだと考えられていたからです。

実際、面白いことに、六二二年にメッカからメディナに預言者ムハンマドが移って、メディナで主導権を握って以来、八世紀の半ばまで、リーダー間の争いはあったものの、七五〇年にアッバース朝が成立したやや後までは単一の政治体でした。西はモロッコ、イベリア半島から、東は、現在のキルギス共和国まで広がる地域、これが一人の指導者のもとに置かれた単一の政治体だったのです。

政治的現実として一つの政治体である時代に、それを支える世界秩序のイメージ、そしてそれを支えるルールの体系ができていったので、実態と理念の発展とが表裏一体をなして成立します。そうした中で、理念上、「イスラムの家」の内部における政治体間の関係というのは想定されていないので、「イスラムの家」と、「戦争の家」に属するさまざまな異教徒の共同体との間の関係のみが意識されているのです。

ジハードも、どんな手段を使ってもいいというわけではなくて、イスラム教徒・ムスリムに課せられた神の掟としてのルールがあって、このルールに従って展開しなければいけないということになっています。そのルールは、シャリーアの上ではシヤルという部門として成立します。シャリーアとは、預言者ムハンマドを通じて伝えられたアッラーの教えに基づいて、良きムスリムが守るべき行動規範の総体が体系化されたものです。

シヤルは、戦時国際法を中心にした近代国際法システムに非常によく似た内容ですが、国際法ではないのです。「イスラムの家」とさまざまな異教徒の共同体との間の関係を律するもので、相互的契約に基づくルールではなく、神から課せられた自己規律です。

歴史的事実としては、アッバース朝の成立した直後から統一は崩れ始め、次第に各地域に、ムスリムがダウラと呼ぶ王朝・国家が並立するようになります。そして国際社会が形成されていきますが、不思議なことに、イスラムの理念の結晶であるシャリーアの中では、ダウラが並立して国際関係が成立した現実は反映されませんでした。したがって諸ダウラ間の関係のルールは、少なくともシャリーア、つまり神の課した戒律の範囲内では成立しませんでした。

もっとも事実上は、シヤルの準用と慣行によって外交関係は律せられるということになっていきました。イスラム世界は、並立するよう

になった諸ダウラ間、諸国家間の交流がだんだんと活発になっていったことに加え、「戦争の家」に属する異教徒の諸政治体との関係も密接になってきたことで、常に開国状態であったと言っていいでしょう。そういう大きな枠組みの一部として、オスマン帝国の外交システムができてまいります。

三　オスマン帝国の外交システム

オスマン帝国も常に開国状態にあったと言えます。もともと、神の信徒に課した戒律体系であるシャリーアの中では、「イスラムの家」と「戦争の家」の間を往還するためのルールが成立していました。地理的に見ると、イスラム世界というのは「陸のシルクロード」と「海のシルクロード」に沿って広がっていた世界です。つまり、イスラム世界の繁栄の多くは、「旧世界」の三大陸をつなぐ海と陸の異文化世界間交易によっていました。それを可能にするようなルールは、幸いなことにこのシャリーアの中にも既に成立しています。それは、アマーン（安全保障）、ムスタミン（被安全保障者）制度です。

アマーンというのは、「イスラムの家」と「戦争の家」が現実の交戦状態にないときに、「戦争の家」の人間、つまり異教徒が「イスラムの家」に来たいという場合に、言わば保証人を求めるという制度です。ムスリム共同体のリーダーあるいはムスリムの個人が保証人となって、一定の期間と目的を定め、しかも「イスラムの家」の中の秩序を乱さないという前提のもとで安全保障としてのアマーンを得られれば、その人はムスタミン（被安全保障者）というステータスを得ることができます。ムスタミンは、そのステータスのもとに「戦争の家」から「イスラムの家」にやってきて、決められた期間の中で、決められた目的のために、決められた大きな秩序を守りながら活動することが許されます。そして活動の成果として、例えば貿易活動をやって利益を得れば、その利益と仕入れた商品を持って安全に帰還できるという制度だったのです。これはムスリム側が一方的に適用するルールです。しかし、ムスリム側は、このルールは双務的な性格を帯びており、自分たちが他の文化世界に赴いた場合にも適用されるはずだと理解していました。

実際、例えばヴェネツィアの場合、ムスリムのトルコ人たちがヴェネツィアにやってきております。ヴェネツィアは表通りが運河で、陸路は裏道ですが、表通りの運河のうちカナル・グランデという最も重要な運河のサン・マルコ広場に比較的近いところの右側にフンダコ・デイ・トゥルチィ（トルコ商館）がありまして、ここに滞在しているイスラム教徒のトルコ人は、交戦状態にないときは、危険を感じることなく商業活動に従事していました。つまり彼らは、実態としてアマーンに裏づけられて活動していました。この制度が、三大陸を結ぶ海と陸の交通の大動脈に沿って、異文化間交易をスムーズに行うことができる前提になっていたのです。

しかも、各地域の支配者はある意味でさらに欲張って、この異文化

間交易を盛んにしようという政策をとります。その結果、シャリーアの本体の上で規定されているアマーンの規制を少し緩和するという試みをいたします。その恩恵的特権として、ムスタミン、つまり「戦争の家」からやってきた異教徒たちに与えられた特権がいわゆるキャピチュレーションです。

ただ、キャピチュレーションは、東西の力関係が変わっていく中で機能も変わり、しかもだんだんと乱用されるようになっていきます。西欧側の専用の特権になって、それが不平等条約化していったのです。近代西欧国際法秩序における西欧諸国間の関係ではできないようなことが残ってしまい、それが不平等条約になったということです。

そこでできたモデルが、今度はその外側、例えば東アジアに入ってくる際、西欧人たちは、初めから不平等条約システムとしてもたらすわけです。東アジアの人々はもちろんそうした経緯を知らないので、条約を結んでしまうのですが、すぐに気がついて、明治日本の場合に顕著なように、条約改正が決定的に重要な外交ポイントになるわけです。不平等条約というのは、元来はアマーン制度を緩和するための規制緩和としての恩恵的な特権賦与であったわけです。

不平等条約のもとでは領事裁判が行われますが、領事裁判というのは中世西欧では当たり前の制度です。異国の人間が他国にいる場合、居留民たちの間の法律的な争訴については、原告・被告双方ともにそれを望んで、しかも地域の大きな支配の秩序を乱さなければ、領事（コンスル）が裁判する。コンスル裁判というのは、中世西欧では当たり前の形です。

西欧では、中世から近代に移る間に絶対王政ができていく中で、領域的主権国家体制ができて、そこで裁判権というのは主権の発動を意味しました。法律は主権のシンボルなので、領域的主権国家の中で囲い込んだ領域において主権を発動し、裁判権はその土地の支配者に属することになったわけです。法律も属人主義の法体系、フィレンツェ人はフィレンツェの法でというような法的属人主義が、フランスにいる者はフランスの法でというような、法的属地主義に変わっていきました。

もともとは西欧、イスラム圏双方が似た制度を持っていました。イスラム圏の場合でも、異教徒の場合、大きな秩序に反しないで、お互いが同じ宗派に属する異教徒で、原告・被告ともにそれを認めれば、それぞれの宗教共同体の法によって裁判を行うことを認めていたわけです。したがって、領事裁判権というのも、当時はお互い共通のシステムでした。

外交のシステムに目を戻しましょう。一四五三年にコンスタンティノポリスが征服されてビザンツ帝国が滅ぶと、オスマン帝国の中心はイスタンブルに移りますが、征服されて間もなくヴェネツィアが交渉を始めます。ヴェネツィアはビザンツ帝国の時代にも常駐の公館を置いていました。バイロという官職が置かれ、これは同時に居留民団のリーダーでもありました。

ヴェネツィアはコンスタンティノポリス防衛戦ではビザンツ帝国側

について奮戦したのですが、オスマン帝国側も東西交易の最も重要なつなぎの一つがヴェネツィアであるということは理解していたので妥協して、ビザンツの時代とほぼ同じ形での関係が復活します。そして、ビザンツ帝国時代のコンスタンティノポリスにあったヴェネツィアの常駐公館とほぼ同様の機関がオスマン帝国の支配下に入ったイスタンブルの町でも開かれ、このときから常駐の在外公館があるのです。

さらに一六世紀前半になると、ハプスブルク帝国がオスマン帝国の西進北上を妨げる最大の勢力になります。ハプスブルクのライバルとして、その背後にフランスがあったことから、フランスとオスマン帝国は、対ハプスブルグ攻守同盟に近いものを、オスマン側の主導で成立させます。フランス側の要請を受け、オスマン側が優位に立ちながら関係が結ばれるということになって、その関係の証としてフランスに常駐の公館を開くことが許されます。その際に、近代の大使とは違うものの、居留民団の代表でもある大使が常駐するようになりました。

これが一六世紀の後半から一七世紀にかけてさらに拡大して、さまざまな国の公館が置かれるようになりました。したがって、イスタンブルには既に一七、八世紀には相当多数の国々の常駐公館があったわけですが、オスマン側は、常駐の必要性がないということで、必要に応じて随時使節を派遣するだけで、常駐の在外公館は開かないという形をとったのです。

中国の場合、交易を兼ねた朝貢の形で、定期的に外交使節が中国を訪問する一方、常駐在外公館は置かず、中国側に用があるときだけ使節を派遣するというシステムをとっていました。

それも近代に入るとだんだんと変化してきますが、やはり前近代の一定の価値観を担った世界がそれぞれ独自の秩序を持った世界として並立しているときには、こういう形が割合普通なのかもしれません。ビザンツの場合もそういうところがあるかと存じます。西欧の場合は統一国家が成立せず、常に政治的に分裂していたので、自世界内で、かえって違う形での外交関係が発展しやすくなったという面があったかと思います。

言語について申し上げると、イスラム世界内での共通語は基本的にはアラビア語なので、外交関係もアラビア語で取り結ばれます。ただ、イスラム世界も、現在紛争になっているイラク・シリアを北の境にして、それから地中海をもう一方の分岐線にした世界の南側はアラビア語を母語にするようになったアラブ世界です。それに対して、その北側の中央をなしているイラン高原では主にペルシア語を話す人々が暮らしている。そのイラン高原のイラン・ムスリムの文化の影響が、一方でアナトリアからバルカンに進んでオスマン帝国に影響を及ぼす。それから、一方で北インドに浸透してインドでのムスリムの世界に影響を及ぼす。中央アジアにも影響を及ぼして、イスラム世界のアラブ圏を除いた北半では、ペルシア語が第二の共通古典語となりました。

外交の共通言語は、ムスリム諸社会の間ではアラビア語です。それに加えて、北半分では場合によってはペルシア語も使います。これはムスリムたちが自ら学んだものです。というのも、ムスリムとして優

秀な文人、官僚であるためには、アラビア語、ペルシア語にも通じていることが必要になります。東アジアの漢字世界で、漢文に通じていることが極めて重要であったのと同じです。

イスラム世界内部では、外交言語は共通の古典語で間に合うわけですが、対キリスト教国用には相手側の言葉を使わなければなりません。しかし、前近代にはムスリム自身がこれを学んで通訳の業務につくことはありませんでした。というのも、オスマン帝国の場合、一六世紀くらいまではかなり多くの外来の人間がいたことが非常に便利だったのです。キリスト教世界からやってきた、あるいはユダヤ教徒としてキリスト教世界から疎外され亡命してきた人々が西欧語を知っていて、しかも現地に適応してトルコ語もできるようになってバイリンガルになる。こうした人々が通訳をしていたのです。

一七、八世紀になって、そういう人々が減ってきますと、今度は別の人材に目をつけます。帝国内で、ある程度差別されながらではありますが、許容されて共存している一神教徒のキリスト教徒、ユダヤ教徒を利用したのです。キリスト教徒やユダヤ教徒は、信者同士のネットワークがあって、常に西欧世界と接触を持っており、交易等も行っていて、西欧語も学んでいるということがありました。一七世紀にはキリスト教圏ではイタリア語が中心ですが、これを解するということで、対キリスト教では帝国の非ムスリム臣民を使えるようになったことは便利だったのです。そのおかげで、日本のオランダ通詞のようなものは生まれません。また、自前の蘭学のようなものも生まれなかったのです。西欧語は帝国臣民である非ムスリムに任せきりでした。

一七世紀の末から一九世紀の初めまでは、特にギリシア系の特定家族が重要な役割を果たしまして、特に政府の首席通訳官はギリシア系のギリシア正教徒の特定の家出身の人が就くようになり、非常に重要な地位とされました。ところが、一九世紀の初めになってギリシア独立運動が起こると、謀反人の縁続きの人間が国家の最高機密に触れ得る地位にあるのは困るということになりました。やむを得ず、ムスリムが西欧語を学ぶことになり、一八二〇年代から三〇年代にかけて、ムスリムのエリート官僚候補がフランス語を学び始めます。日本と比較してみましょう。蘭学を生み出せなかった点ではムスリムが遅れていますが、本格的に西欧語の通訳ができる人が出るのは、日本の場合はオランダ語を除くと幕末ですから、実はムスリムのほうが三～四〇年ほど早いのです。それは西欧世界の隣にあって、常に拮抗してきた歴史があるからだと思います。そういう中で、西欧との関係が問題になってまいります。

四　「西洋化」改革と常駐在外公館開設

対西欧関係についてお話しします。

イスラム世界は、七世紀の半ばから八世紀の半ば、アラビア半島から東西に押し出して、一方ではササン朝ペルシアを滅ぼして中央アジアまで広がります。他方ではビザンツ帝国領に侵入して、シリア以南

の地を獲得する。それから、今度は西ローマ帝国の跡地とゲルマニアが一緒になって成立しつつある西欧カトリック世界の南半に侵入し、大まかに言えば、かつてのローマ帝国の版図の南半分はアラブ・ムスリムの支配下に置かれました。さらに、一五世紀の末までは、イベリア半島もアラブ・ムスリムの支配下に置かれていました。

こうしてイスラム世界が成り立ってまいりますが、それ以来一五世紀の末まで、軍事的、政治外交的、さらには経済的にも、ほぼイスラム世界は西欧世界に対して優位にあったと言っていいかと存じます。八世紀の末から一五世紀の初めにかけては、知的にもヘレニズムのギリシア遺産を正統に受け継いでいるのは西欧世界よりもむしろイスラム世界のほうでした。イスラム世界でギリシア・ヘレニズムの古典がアラビア語に翻訳されることによって、ギリシア・ヘレニズムの遺産に西欧人が触れられるようになったということを考慮すれば、ある地点までは優位にあったと言えると思います。しかし、大航海時代に至って徐々にその優位は崩れ、一七世紀の末になると完全に逆転して、イスラム世界は「西洋の衝撃」にさらされ始めるということになります。

そうした「西洋の衝撃」への対策として、初めは伝統的なシステムの綱紀粛正で対応しようとしますが、それではとても対応できませんでした。一八世紀の前半には、西欧人たちはこれまでと全く異なる新しい力を持ち始めているという認識がイスラム世界の中から出てきて、近代西欧のモデルを受け入れながら少しずつ自強を図って、これに対抗しなければならないという動きが出てまいります。

このような動きも日本と比較すると、日本では天保の改革で西洋砲術を本格的に学び直さなければという時代に入るので、日本よりも一世紀早いわけです。中国と比較すると、アロー号戦争で北京を占領されて目が覚めて、洋務運動が始まるということになりますから、一二〇年ほど早くから運動が始まります。

しかし、イスラム世界でのこの動きは、当初は非常に部分的で、しかも抵抗が大きいので一進一退です。一七八九年、フランス革命の年の四月に第二八代セリム三世が登極します。セリム三世は、時代は変わったので、近代西欧のモデルを体系的に受け入れて、本格的に西洋化を始めなければいけない。その一番重要な部分は軍制であるということで、軍制改革に取り組みます。

他方、近代西欧世界では、ルネッサンス時代、イタリアの都市国家の間で非常に密接な外交関係が取り結ばれ、常駐在外公館システムが成り立っていって、イタリアという箱庭でできたモデルが、西欧世界全体に広がっていきました。なぜこのように広がったかというと、イタリアは当時西欧世界において文化の領域でもっとも光輝を放っていたからです。食べ物もファッションも、あらゆることがイタリア・ムードだったのです。ですから、文化の光輝とともに外交システムも広がり、そして西欧世界の中では、絶対王制が完成されて、領域的主権国家という政治単位の在り方が固まっていくとともに、政治単位間の関係も固まっていきます。しかも、一七世紀前半には三〇年戦争という絶大な災禍が起こったことにより、ルールの体系をさらに強固にしな

ければならないという動きが生じました。その動きは、『戦争と平和の法』を著したグロティウスによって理論的に整備され、一七世紀から一八世紀には、実際的にも慣行が積み上がっていったうえに、さらにそれを理論化、体系化する動きが進んでいったのです。

そうした動きの中で、常駐大使館も当たり前のものとして広がりつつありました。しかしオスマン帝国は、各国の公館がイスタンブルに設置されているけれども、オスマン帝国側が外国に常駐の大使館を置く必要はなく、随時使節を派遣すればそれで足りるとして、当初自国の大使館を設置しないでいました。そうは言いながら、伝統的なシステムを基礎にしたまま軍事力で対抗するのは難しい。そこで、外交的努力でもってなるべく失点を防ぐようにする。失点を防ぐためには、一方で友好親善を深め、他方では情報収集をするという必要があったのです。そこで、セリム三世は、常駐の大使館を西欧の主要国に置くという決定を下して、実際に大使館を設置します。これはイスラム世界の歴史の中では画期的なことでした。

西欧側のほうは、自らのシステムに自分たちのルールに則って参入してくれると受けとったようで、こうした動きを大歓迎し、西欧側のほうではほとんどトラブルなしに事は進みました。むしろオスマン帝国内でのイスラム的保守派の抵抗がありましたが、これを抑え、常駐大使館を開くことに成功したのです。

当時、オスマン帝国にとってヨーロッパ最大の友好国であるフランスが革命で混乱していたので、最初の大使館はフランスではなくイギリスに開かれました。フランスで開かれたのはその後で、次にはハプスブルク帝国でした。また、その次にプロイセンにもう一つ大使館を開いたことは、先を読んでのことでした。

プロイセンは、一八世紀の半ばからかなり重要な位置を占めていました。その頃、オスマン帝国にとっての主要な敵は、東北方のロシア、西北方のハプスブルク帝国でしたが、その後ろにいて両者を牽制し得る位置にいたのがプロイセンです。プロイセン側にとってもオスマン帝国は、かつてのフランスにとってのような頼れる同盟者ではないにしても、南側から宿敵の背後を乱すことができる相手としては有用でした。つまり遠交近攻でプロイセンとは友好関係を結んでおり、領土が接していないため領土紛争が起こるおそれがないということも幸いして、ここにも大使館が開かれました。

しかし、こうして設置された大使館はよく見ると、純近代的在外公館ではなくて、伝統的システムに基づいて、常駐大使がイスタンブルにいるからにはこちらも送るという感じでした。駐在する人は西欧語ができない、純粋のオスマン朝型の官人です。アラビア語とペルシア語はできるけれども、西欧語に対して意欲のない人々です。服装も、トルコ式のターバンにカフタンという長衣をまとった伝統的服装で赴いています。この人々は、外交官として招かれた場合もその格好で出かけるので、異彩を放ったようです。通訳として随従していたのは、主にギリシア系正教徒の通訳官たちでした。

したがって、近代西欧の国際法についての知識も、通訳官たちのほ

うはある程度摂取していたかもしれませんが、オスマン朝から派遣された大使閣下は、良くわきまえていませんでした。ただし、政治力を発揮した人物はいたようで、例えばフランスに派遣されたハレット・エフェンディという非常に腕利きの官僚上がりの政治家は、フランス語もルールの体系もよくわからないのにタレーランと渡り合い、タレーランを翻弄したと言われております。これは知力と人間力の成果です。そういう事例はありますが、概して中途半端な常駐在外公館が置かれたのです。

しかも、一八〇六年に反対派の力が高まって、セリムが退位して改革が挫折すると、直ちには廃止されなかったものの、立ち消えになってしまいます。

その後、第三〇代の君主として即位したマフムート二世は、即位当初は周囲は敵ばかりでしたが、人事を上手に動かしながらだんだん腹心をつくっていって、一九年待って一八二六年になりようやく思ったことができるようになりました。一六世紀にオスマンの進撃の最大の武器であった鉄砲と大砲を巧妙に使う常備歩兵軍団として最精鋭であったが、後には抵抗勢力の核になっていたイェニチェリ軍団を廃止して、本当に自分の望む改革、つまり真に体系的かつ全面的な西洋化改革を開始します。

そのうちのひとつとして、近代西欧国際法及び近代西欧外交システムにのっとった形で常駐大使館を開くという試みを始めます。とはいえ、マフムートにしても初めから事情をよく理解していたかどうかはわかりません。実際、この改革の初期には、国際情勢を知らなければいけない、国際的ルールも知らなければいけないというので、何とシャリーア、すなわちイスラムの戒律の中の国際法に似た部分であるシヤルについてのアラビア語の大著をトルコ語に訳させて、これを主要な官人、武人たちに、今は国際化の時代だからこれを読めといって配ったと伝えられています。まるで中国の春秋戦国時代のルールの本をわかりやすい解説にして、これを配って、今は国際化の時代だからこれを読めといったような感じです。

ですから始めのうちは、事の次第に理解が不十分なところがあったかもしれませんが、この常駐大使館は本格的に機能し始めます。しかも、一八二二年からギリシア独立運動が起こると、独立運動で反乱を起こしている者に連なる人間に通訳官として国家機密を委ねられないというので、フランス語を解するトルコ人外交官の養成に取りかかります。この人々も担い手となって、近代西欧的ルールに従った近代西欧外交システムの一環としてのオスマン帝国の常駐大使館網が本格的に広がり始めます。

この間に一七九八年のエジプト侵入があって、フランスと珍しく戦火を交えることにはなりましたが、一六世紀初頭以来の西欧における最大の友好国であるフランス、それからイギリス、ハプスブルク帝国としてなおプレステージを保っていたオーストリア、そして新興国のプロイセンに大使館が設置されています。それから西欧世界の外、ある意味では異文化の世界に属する国ではあるけれども、ヨーロッパ列

強として台頭してきたのはロシアです。しかも当時、オスマン帝国にとってロシアはハプスブルク帝国と並ぶ二大脅威となっていたので、ロシアにも常駐の大使館を置くということになります。

そこで大使館を開設した相手国を見てみます。ほとんどが西欧の列強である英、仏、墺、普です。ロシアは西欧化した東欧の強国、まとめればこの五カ国はいずれもヨーロッパ列強であり、それらが軸になって大使館網がつくられたということです。

ただ一つの例外がイランです。イランはイスラム圏の国ですが、東隣の大国で、古くから和戦両様の関係があって、文化的にはトルコはイランから圧倒的な影響を受けています。芸術においても、文学においても、書道においても、イランの影響というのは一九世紀の初めまで続きます。トルコに非常に大きな影響を与えた国です。しかし、一方で一六世紀の初めにシーア派のサファヴィー朝が出てきて、サファヴィー朝のもとでイラン全体がシーア派社会に転換し、非常に微妙な関係にある国ですが、このイランに大使館が開かれます。

一連の動きは順調に進んで、一八五五年までには一三カ国に常駐の在外公館が開設されました。西欧側ではイタリア、スペイン、オランダ、ベルギー、さらに西欧の新大陸における飛び地というべきアメリカに広がります。

西欧世界ではない国としては、セルビアとルーマニアに常駐在外公館が置かれます。ただ、ルーマニアはオスマン朝の元の属国です。また、セルビアも元はオスマン領で、オスマン領から独立した国です。旧帝国圏という意味では、大英帝国の英連邦の参加国のようなものです。こういった、元は自国の支配下であった地域にも在外公館が開設されていきます。

オスマンの最末期までには、西欧世界の中でも、もはや列強とは言えない国にまで広がり、スウェーデン、スイスまでが入るということになりました。結局、西欧圏一一カ国、東欧圏ではロシア、それに旧オスマン領であった四カ国が加わって、イスラム圏はイランのみという形になっていったわけです。

そのうちに、最大の脅威の一つであったハプスブルク帝国と、それからその後方にあって一八世紀以来の新しい友好国となっていたプロイセンの後身のドイツ帝国によって第一次大戦に引っ張り込まれ、仇敵のハプスブルクと戦友となって戦うという奇妙な運命に陥りながら敗戦国となって、一九二二年にオスマン帝国は消滅します。そして一九二三年に成立したのがトルコ共和国です。

トルコ共和国が成立して三年後に、初めて体系的な『共和国年鑑』ができますが、そこではオスマン帝国時代に加えて新たに一一カ国が、トルコ共和国の外交網に入っております。その後ブルガリアとアルバニアが外交網に入ってまいりますが、これは言うまでもなく、バルカンにおける旧オスマン領の国です。特にアルバニアは、正教徒と少数のカトリックがおりますが、イスラム教徒が人口の多数を占める、旧オスマン帝国から独立した国です。

それから、ユーゴスラビアは旧セルビアが中核になって成立した、

第一次大戦後のベルサイユ体制による新しい国ですが、セルビアの後継国家という位置づけで外交網に入ってきます。

また、エチオピアが入っていることは異質に思われるかもしれません。実はエチオピアの沿海部は、一五四〇年代以降、断続的ですが一九世紀の後半までオスマン朝の直轄領であったのです。ハベシュ州というのが置かれて、総督は中央から任命されている時期が長かった地域です。そういう意味ではトルコと縁の深い国です。したがって、ブルガリア、アルバニア、ユーゴスラビア、エチオピアの以上四つは旧帝国圏内にあったわけです。

もう一つ注目したいのは、ポーランド、チェコ・スロヴァキア、ハンガリーの三国です。ポーランドはハプスブルク、プロイセン、ロシアに分割されていたものが独立した国家です。チェコ・スロヴァキアとハンガリーは、ハプスブルク帝国が民族自決原則で分割されてできた新興の独立国で、ベルサイユ体制とウィルソン原則を反映してできた新興国が、そのまま新しいトルコ共和国の外交システムに組み入れられています。しかも、ハンガリーはハプスブルク帝国でしたが、その前は一世紀半も、オスマン領だった国です。

イスラム圏のほうに目を転じますと、イスラム圏で新しく常駐在外公館が開かれた国がありますが、一つがエジプトです。エジプトももともとオスマン帝国領で、一八八二年のオラービー・パシャの乱以降、イギリスが事実上軍事的に占領していますが、国際法上は権利がないままに居座っているという形でした。第一次大戦とともに独立を宣言して、それで第一次大戦後、名実ともに形は独立国になったけれども、イギリスの保護下に置かれている国で、旧オスマン帝国領、したがって帝国圏と言うべき地域です。

それから、アラビア半島もみてみましょう。第一次大戦でベルサイユ体制が固まっていく隙をついて、フサイン・マクマホン協定の当事者であるハーシム家のフサインを逐って天下をとったのがサウド家です。当時はサウジアラビアを名乗る前で、サウド家の王国と称されますが、これがやはりオスマン帝国の後身であるトルコ共和国の常駐在外公館網の中に入ってきます。ここも旧オスマン帝国の領土であったところで、いわば帝国圏です。

オスマン帝国の版図と関係なく、しかし西欧でもなく東欧でもない国としてアフガニスタンがありますが、アフガニスタンはイスラム圏の国です。トルコ共和国の外交網というのは、少なくとも一九二四年にある時点までの広がりはアフガニスタンまでです。つまり、西欧諸国、西欧にならって列強に伍したロシア、それから東欧正教世界には属しているけれども、かつてオスマン帝国に属していた帝国圏というべき国々、それからイスラム圏のみであって、その外には広がっておりませんでした。

その後に、一九二四年にローザンヌ条約を日本が承認し、批准書が寄託されて、日本とトルコの正式な外交関係が成立することになったわけですが、これでイスラム世界でもない、西欧世界でもない、東欧正教世界でもない、旧帝国圏でもない世界に属する国として、初めて

日本と国交を持つことになります。しかも、一九二五年に正式に大使館を開設します。

確かに、近代外交システムをつくり上げ、そして実力で世界を一つのグローバル・システムに統合していく原動力になったのは、西欧世界でした。この西欧世界の新しい力に押され、自己変革を遂げていく過程で近代外交システムに参入していかざるを得なかったオスマン帝国の外交相手国としては、西欧圏の国が主をなすのは当然だと思われます。

本当は、領事関係のほうが実利的な問題と関係が深いので面白いのですが、数が非常に多いので、今回は手が及びませんでした。

しかし、少しだけ領事関係に触れておきますと、意外なことに、ラテン・アメリカの国に多くの領事館が設置されていることに気づきます。その理由は日本の場合と同じで、かつては労働力として、オスマン帝国の臣民たちがラテン・アメリカの国々に渡っていたからです。そして臣民保護が必要になって、そこで関係を取り結ばざるを得なくなったのです。日本の場合は公使館を開きましたが、オスマン帝国では大公使館を開くことまではしないで、とりあえず領事館で事を処理していくということになったようです。

西欧圏と、それから東欧正教圏に属するものの、西洋化してヨーロッパ列強の雄の一つとなったロシア、それからイスラム圏、そしてそのいずれにもまたがって、とりわけ目立つ旧帝国圏と思われる諸国があります。他の国であればあまり外交網に入れそうもないような、モンテネグロのような小さい国が入っているのは、モンテネグロも旧オスマン帝国領だったからです。つまり、旧オスマン帝国から独立していった国は、いかに小国であっても自分の外交システムに組み込むという傾向が見られます。オスマン帝国の場合は、西欧圏及びヨーロッパ列強、自文化圏であるアラビア文字圏としてのイスラム圏、そして帝国圏が外交システムに組み込まれましたが、旧帝国圏を含んでいるという点が特徴的であったように思われます。

五　漢字圏における日本と中国の常駐在外公館の発展

次に比較のため、漢字圏に目を転じてみます。

漢字圏では日本と中国を取り上げてみたいと思いますが、これら両国はイスラム世界に比べると、政治体としてははるかに非開放的でした。中国では、特に西欧人に対しては非常に厳しい制限を設けて、広東で限られた形の貿易を許可していました。

日本の場合も、完全に閉ざしているわけではないけれども、正式に国交があるのはオランダと、同じ漢字世界内の朝鮮だけであって、中国とさえ正式な外交関係はないという状態でした。中国とは交易関係だけがあって、中国側のほうも互市を通ずる国の中に入れていて、交易相手としてだけ認めているという状況だったのです。

開国後の一八五五年以降、西欧諸国とロシアが日本に常駐在外使節を設置し始めますが、その際に置かれたのは全て公使です。日本側は、

当時は外国に臨時の使節団、遣欧使節団や遣米使節団を出してはおりますけれども、まだ常駐の在外公館を出す余裕はありませんでした。一八六八年の明治維新の後、徐々に体制が整備され、一八七一年から常駐の在外使節の派遣を始めます。初めは弁務使と言われていたようです。法制上は一八七三年に、特命全権大使、特命全権公使以下の職制が整備されていき、大使は職制上存在しましたが、当初派遣されたのは全て公使でした。

日本からの公使がどこに派遣されたかというと、近代西欧外交システムに後から参入せざるを得なくなったということを反映し、オスマン帝国と似たところがございます。一八七一年にフランス、アメリカ、一八七二年にイギリス、一八七三年にオーストリア、一八七四年にドイツ、イタリア、ロシアで、列強に伍した東欧正教圏のロシア以外は全て西欧圏で、全体としてはヨーロッパ列強と括ることができるでしょう。

清朝のみは非ヨーロッパの国ですが、しかし漢字圏で、日本とは非常に深い交流があって、もともとは文化の師匠でもあった国です。

一八八二年にはハワイと外交関係を結びまして、在外公館を開いております。ハワイ側は熱心で、日本に合邦を提案したこともあると言われています。日本側では、その申し出に驚いて丁重にお断りしたようです。しかし、ハワイはその後アメリカに併合されてしまうことになり、一八九八年には在ハワイ国公使館は閉鎖されました。

そして日露戦争が日本の外交網の発展においては一つの分水嶺になると思います。日露戦争の時点では、交戦相手のロシアを除くと一五カ国に公使が常駐していて、うち一〇カ国は西欧圏で、ほかの多くもいわば西欧圏の延長線上のラテン・アメリカ圏です。ラテン・アメリカ圏の場合は移民保護、邦人保護のために置かれているという特殊な目的があったと思われますが、大体は西欧圏とその延長線上と理解できます。そして残る三カ国のうち、二つは漢字圏の国です。一つが清朝（中国）、もう一つが日清戦争の結果、清朝が宗主権を放棄して完全な独立国となった韓国です。韓国の高宗という人はなかなかやり手で、自ら皇帝を名乗り、中国が切手等でも「大清帝国」と称していたことに恐らくは対抗して「大韓帝国」に改称し、そのまま清朝とも大韓帝国の名称で外交関係を樹立します。驚いたことに、北京に大韓帝国の公使館が開かれています。清朝側がよく文句を言わなかったと思います。そして、日本にも大韓帝国の公使館が開かれるということになりました。しかし後に大韓帝国は日韓併合で併合されてしまいます。

この時点で、日本と同じ漢字圏でも、ヨーロッパ圏でもない国が一つ、日本の常駐在外使節網に入っております。それはタイです。タイは、確かに地理的に日本と近いこともあるし、大航海時代、南蛮時代には深い関係があった国です。日本と同じモンスーン・アジアに属し、しかも上座部と大乗との違いはあっても、仏教国という共通点がありました。それに加えて、ちょうど明治天皇と在位時期がほとんど同じ英主が当時タイにおられました。それがラーマ五世（チュラロンコン大王）です。当時、ラーマ五世は鋭意大改革に着手しており、仏印を

形成しつつあるフランスと、それからビルマまで進出しているイギリスの両方を手玉にとって、そのバランスの中で独立を保つ方策をとって、フランスよりは安全だということで、家庭教育にはイギリス人を起用しました。他方で、法制整備は日本に頼るところがあって、日本から政尾藤吉という、早稲田大学を出てアメリカで法学の学位を取った人物をタイに招聘しました。いわばタイのボアソナードという感じでした。また、王族には、チュラロンコン大王の片腕として内務大臣を務めた非常に優秀な行政官、政治家でもありながら同時にタイの制度史研究の基礎も築いたダムロン親王がおられて、ダムロン親王の支援協力のもとに、日本人が中心になってタイに近代法制がつくられていくという時代でした。

ただ、広く見れば、タイは漢字圏ではないけれども、仏教圏です。ですから、文化的にも全く異質な世界ではない。しかも、米を食べる世界です。もちろん食の作法はインド式です。箸ではなく右手の指で食べます。東北タイはもち米をくるくると丸めて食べますし、中部と南部はむしろインド式に近く、米を指先でまとめるという食べ方をするところで、その面では異文化ですが、どこかで共通性のあるところまで外交網は広がっていたわけです。

その後、日露戦争で勝利すると、国際的なプレステージが上がった日本は、プレステージが上がったことを外交システムにも反映したいと考えるようになります。大使館昇格は非常に費用がかかるので、それまでは困難であると思われていましたが、これから経済的にも豊かになるという公算が生まれてきたのです。

そこで、日本は公使館を大使館に昇格するという運動を始めます。相手国のヨーロッパ列強も、日本のプレステージが上がってきているのは重々承知しており、これに好意を示し、大使館昇格が行われました。まずイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、アメリカ、それから今度は日露戦争の仇役になったロシア。割合小さい国なのにベルギーが入っているのは不思議です。ブラジルも含まれております。ブラジルはもちろん移民問題があって非常に重要で、格式を保つことが必要であったと思われます。ただ、いずれも西欧圏かヨーロッパ列強です。

もともと文化上の師匠であって、一番深い関係があった外国は中国ですが、中国公使館の大使館昇格は一九三五年のことでした。その前にトルコと一九二五年に国交が成立し、常駐在外公館を開設しようという動きが出てまいります。その交渉が実り、一九二五年には相互的にトルコ共和国は東京に、日本は、当時はまだアンカラが首都としては未整備だったので、イスタンブルに在外公館を開きます。

非常に面白いのは、トルコには最初から大使館が開かれたということです。要するに、英米独仏伊、ロシア、ベルギーとブラジルがありますが、こういうところにしか大使館がなく、中国にさえ公使館しかないというときに、トルコには大使館が置かれることになったわけです。これは異例の事態で、その後の外務省の外交官のキャリア・パターンにも影響を与えただろうと思われます。確かにトルコ大使の格は高

く、トルコ大使になると、その後はイタリアやドイツの大使になるパターンが多いのです。ヨーロッパ・ロビーのトップクラスに上がる人物が、前段階としてトルコ大使を務めるということが多い。すなわちトルコには一流の外交官が赴任しております。

なぜそういう配慮をしたのかというと、一つはオスマン帝国の対ヨーロッパ外交の伝統を考慮したのです。西欧の主要国はいずれも特命全権大使を置いているので、特命全権大使がいるところに特命全権公使を送っても、外交序列では一番下に置かれます。争いにならないように、大使は着任順で序列が決まるようにだんだんなっていったと言われていますが、特命全権大使の挨拶が終わった後で特命全権公使の挨拶という順序で、新任だと最後になります。

上り坂にあった日本にとって、やはり体面というものも一方では非常に重要で、しかもオスマン帝国というのは、かつてはハプスブルクを震撼させた、一六世紀にはヨーロッパの脅威であった国です。イギリスなどの場合、オスマン朝が衰えてきた一九世紀になっても、駐トルコ大使から外務大臣に転じるということが例としてありました。ですから、日本もそういったトルコの外交史を踏まえ、イスタンブルの在外公館界を考慮して大使を置くことにしたと思われますが、それにしても相当の決断であったと思われます。公使館と大使館では費用が格段に違うのです。清朝なども、在外公館を開くと金がかかるということで、費用の不足を理由にしてなかなか在外公館を開かなかったと言われております。

大使館にすると、公使館よりもさらに費用がかかるということで大変なはずなのに、なぜあえてトルコに当初から大使を置くことにしたかというと、トルコの重要性が相当高まっていたことも理由の一つです。当時のバルカン情勢に関する論策でも、あの地域の諸国の中ではトルコが一番重要であると言っておりますし、同時にイスタンブルの外交界の歴史的伝統も踏まえると、その重要度は言うまでもないと思います。

トルコ共和国の側でも、欧米でもイスラム圏でも旧帝国圏でもないところに在外公館を置いたのは日本が最初です。しかも最初から大使館を置くということになったわけです。トルコ側としても、アジアの新興勢力として目覚ましい発展を遂げている日本への期待が大きかったことが、大使館を開いた非常に大きな理由であったと思います。一方で重要性を考慮するということがあって、かつ日本側の要望もあるので、大使館を開くことになったのだと思われます。

私の本職は近世のオスマン帝国の組織とエリートの発展、変容過程といった領域の研究なのですが、日本に着任したトルコ大使のキャリア・パターンの分析も手がけたいと思っております。今のところ充分には手が届いておりませんが、かつて日本に駐在経験のあるトルコの大使は、近年では、いずれも日本から離任された後、非常に重要な国家の要職に就いておられることに注目しています。

ちなみに、国家あるいは政治単位としてのありようは、非常に同質性が高い、割合小さくまとまった社会を基礎にしていた日本に比べる

と、文化的な多元国家で、広大な領地を有し、しかもその地域の世界の価値観を担うような性格を持っていた点で、オスマン帝国に近かったのは清朝であるかと思われますので、清朝の場合を比較の視角から見てみたいと思います。

清朝には『搢紳全書』というものがあって、これを見ると、外交システムの在外公館はどこにあるか、年を追って見ることができます。この在外公館の発展過程については、箱田恵子さんという方が、中国における近代外交の成立について大著（『外交官の誕生―近代中国の対外態度の変容と在外公館―』名古屋大学出版会、二〇一二年）をお書きになって、この中で非常に詳しく論じておられます。その中では、どういう事情で在外公館が置かれて、そこでどういう仕事をしていて、どういう形で人が養成されたかという観点から研究しておられます。私の巨視的な観点と違うところもあるので、ご紹介いたします。

中国の場合、来る者は拒まずというシステムで、朝貢の形をとってやってくれば、どの国の使節でも受け入れ、そして贈り物を受け取って、かなり多くの贈り物を倍返しにして帰すというシステムがあるわけですが、中国側からは必要に応じて使節を出せばいいという態度を、頑として変えませんでした。

その中国はアロー号戦争で破れ、六〇年代から洋務運動が本格化しますが、在外公館を出したほうがいいという意見と出さないでもいいという意見がせめぎ合っていたようです。出さないほうがいいという意見も、そういうものは要らないという意見だけではなくて、出そうにも人がいないではないかというのが一つと、出そうにも金がないではないかという意見があったと、箱田さんは御著書の中で書いておられます。

結局、一八七五年以降に公使格の欽差大臣を常駐使節として送り始めます。欽差大臣が廃止されて公使になったのは中華民国成立以降で、大使昇格が始まるのは中華民国一二年以降ということで、かなり時期は遅れます。

欽差大臣は、まずイギリスとアメリカに派遣されます。興味深いのは、三番目に日本に送られたことです。この事情については箱田さんが詳しく書いておられます。日本を非常に脅威に感じていて、日本に在外公館を置くことが重要だということになったわけですが、日本は漢字圏の国で、ある意味では同文化の国であることをわきまえているので、中国は一流の文人を外交官として送り込みました。かつて日本の地方の文人たちが、中国道場の先進の兄弟子ともいえる朝鮮通信使のところに添削を請いに出かけていって、通用するというのを見せようとしたように、まだ幕末の文化を背負っている漢文系の知識人たちはそれを非常に喜んだのです。

次いで欽差大臣はドイツに置かれ、ロシアに置かれました。新興のドイツは西欧世界です。ロシアは西欧ではないけれども、ヨーロッパ列強として台頭して、東北方から迫っている脅威ですので、置かれたわけです。

フランスに派遣されていないのは驚くべきことです。最初は駐英公

使が兼任し、後には駐独公使の兼任となります。フランスはヨーロッパの外交システムの原型を作った国です。しかも十八世紀の半ば以降、ヨーロッパの外交言語はイタリア語からフランス語に移ります。様々な外交儀礼も大体フランス・モデルで、日本などは明治天皇が洋服をお召しになって以来、外交使節を饗応する際には日本料理ではなくフランス料理を供するということになっていました。このように、外交及び外交に関する文化的な付属物までモデルを提供しているフランスに、清朝は常駐の専任外交官を送っていなかったのです。

おそらく、清朝には自国内及び近隣についての関係だけを念頭に置いてシステムを構築するところがあったのではないでしょうか。これは日本やオスマン帝国の場合と比べて驚くべきことです。中国からフランスに、兼務ではない本官が派遣されたのは一八九五年のことでした。フランスの事例を見るかぎり、中国は、近代西欧外交システムについて、ヨーロッパ諸国とは異なる受け取り方をしていたと思われます。

その点オスマン帝国は清朝と対照的です。オスマン帝国には、東西交易の最も重要な商売相手であったヴェネツィアが、ビザンツの伝統を継いで在外公館を置きました。その次に置いたのはフランスでした。ところが、中国の場合は非常に遅くなって、常駐として本官が派遣されるようになります。

その後清朝は、大韓帝国となった朝鮮王朝に、一八九九年に公使を派遣します。しかし、日露戦争で日本が勝利してから、一九〇五年には撤退して、神戸に事務を移すということになったため、短期間しか続きませんでした。以上は漢字圏のお話です。

最末期までにはベルギーとオーストリアにも欽差大臣を送っておりますが、広い意味でのヨーロッパ圏と漢字圏が中心で、その外には少なくとも清朝の時代の外交網は及んでいなかったのです。

しかも、清朝の場合に非常に特徴的なのは、広大な版図を有して、文化的に非常に多元的な国家で、漢字世界における一種の世界帝国的性格を帯びていたにもかかわらず、オスマン帝国と違って「旧帝国圏」というものが存在しないのです。旧帝国圏がない理由は、一つは清朝時代の藩部に当たるところが独立を達成しなかったために、曖昧な形で清朝の規制下に残り、それが現在の中華人民共和国においても版図の中に残っているためです。事実上独立国ではありますが、中国側から見れば、朝貢国として属国的な位置にあったのがヴェトナムと朝鮮王朝ですが、ヴェトナムは清仏戦争でフランス領に組み入れられてしまいました。

残ったのは、つき合いはないけれども漢字圏で文化的に近い日本と、大韓帝国を名乗り始めた朝鮮王朝ということになります。日本は帝国圏の埒外にあった国だということで、結局、旧帝国圏に含まれるべき地域で、近代になって在外公館が置かれたのは朝鮮王朝だけだったのです。つまりオスマン帝国と清朝は構造が似た国家ですが、分解の仕方が違っていて、清朝の場合は、旧体制の王朝は倒れたけれども、旧体制の王朝の版図は保たれたのです。結局、辛亥革命から軍閥時代、

それから日本侵略時代があっても、これを切り抜けて、一乱一治のシステムをそのまま実現して、清朝の一治が、軍閥それから列強の侵略時代に一乱に入ったけれども、中華人民共和国になって一治を取り返しました。版図がそのまま保たれたために、かえって帝国圏は生まれなかったのです。

オスマン帝国は、崩壊の過程がハプスブルク帝国に非常に似ております。コア部分を残して完全に分解してしまい、最後のコアの部分が国民国家として再生して、それがトルコ共和国になったという面がありました。オスマン帝国の末期、解体の過程で旧帝国圏が成立したのであろうと思われます。

その点は、ソ連邦として正教から共産主義に看板を掛け替えて、ロマノフ朝から共産党へと中核を入れかえたロシア帝国と対比しても興味深いように思われます。この場合、ソ連邦時代には、ロシア帝国時代の版図を保ちます。ソ連が崩壊してからは諸国民国家に分裂しますが、ロシアは外交網も航空網も、旧帝国圏の全ての国々と、かなり目立った形でつき合いを持っているという特徴があります。

ハプスブルク帝国とロシア帝国およびソ連の解体過程とを比べて、在外公館の配置や、第二次大戦後においては国家的航空網の広がりを比較することも面白そうですが、それらは現代を御研究なさっている先生方の課題かと思われます。非常に大まかなお話で恐縮ですが、この辺でお話を終わらせていただきます。

質疑応答

問　トルコという国は半分アラブで半分アラブではないとも言われておりますが、先生のお考えはいかがでしょうか。また、トルコのそのような特徴が、日本とトルコの国交や、あるいはトルコの外交政策、国際関係に何らかの影響を及ぼしているということはあるのでしょうか。

鈴木　言語面から見ますと、古い言語の分類ではトルコ語はアルタイ系に属していまして、モンゴル語と非常に近いのです。日本語とはツングース系の諸語とアルタイ語との関係に近いところがあって、言わば従兄弟といったところで、モンゴル語は兄弟というところかと存じます。

アラブの場合は、セム系でして、アッカド語からバビロニア、アッシリア、それからフェニキア、ヘブライと、これがセム系でして、トルコとは全く言語系統が違っております。

それから、文字も、オスマン帝国時代に使われたアラビア文字は、中央アジアにアラブの大征服でイスラム教徒が入って、中央アジアにイスラム文化が浸透した結果、イスラム教徒が増えて、ムスリム化した中で取り入れた文字です。

この関係は、ちょうど日本と中国の関係に似ております。同じ漢字圏である中国の文化の影響で、韓国、ヴェトナム、琉球、日本は漢字を受け入れ、漢文を受け入れ、漢語を受け入れ、箸を受け入れ、

多くの共通文化を持つようになりました。しかし、お互いに違いは残っている。このような関係に似ています。

しかも、韓国、ヴェトナムの場合は儒学を本格的に取り入れていました。朝鮮半島で教説だけではなくて礼まで取り入れていたのと同様に、トルコもアラブ・ムスリム文化の非常に大きな影響を受けて、アラビア文字を取り入れました。それから、共通古典語としてアラビア語をベースにしました。アラビア語の単語が大量に入ってきたため、しかもイスラム教を本格的に受け入れ、日本の仏教や儒学のように礼を入れない、戒律を入れないという、理屈だけの受容ではなくて、オスマン朝の場合はシャリーアという戒律体系も入れておりまして、むしろ朝鮮半島で儒学が定着したのに近い形をとっています。

また、トルコでは、文化的に大きな共通要素があっても民族的には異なるということ、さらにどこが違うのかということも意識されていました。一六世紀の倫理学の本を見てみても、トルコ語を話すトルコ人と、ファルスィー、つまりペルシア語を話すイラン人と、アラビー、すなわちアラビア語を話すアラブ人というのは、基本的に言語を通じて互いに違うものだという意識が持たれております。

アラブ系の人々のうちには、トルコを「半分アラブで半分アラブでない」という言い方をする方もいらっしゃるかもしれません。それは、中国研究者で、東洋と言えば中国だと思っている方がいらっしゃるようなもので、トルコ人からみれば、いささか傲慢な言い方です。確かにイスラム世界の一〇世紀までの歴史では、アラブ人が非常に大きな役割を果たしております。しかし、一一世紀以後の政治史、軍事史ではトルコ系が圧倒的に強い力を発揮しました。エジプトも、マムルーク朝の原流はトルコ系のマムルークですし、オスマン朝がアッバース朝の領土のうち、イラン以東とモロッコ、イベリア半島を除いたほぼ全領土を支配して、それに加えて、かつてのビザンツ帝国領のアナトリアとバルカンを支配したので、「半分アラブで半分アラブでない」というのはかなり問題のある言い方です。

アラブ・ムスリム文化の大きな影響を受けて、しかもイスラムという共通要素、アラビア語という共通の古典語を持った点で、アラブとトルコは非常に近い文化的な関係はあるけれども、違う民族である。それは、日本と中国との関係に似ているかと存じます。

近代になってアラブ諸国が独立すると、直近の過去を否定して未来を求めようとする傾向が出てまいります。これまで、オスマンの支配が暗黒時代であって、かつて輝かしかったアラブの世界が近代に入って独立を達成する過程で光を取り戻していくという構図で歴史が書かれてきました。オスマン朝時代のアラブ史を、トルコ語の史料とアラビア語の史料を併用して研究する研究者というのはこれまでほとんどいませんでした。ようやく最近になって、両方研究する方が出てきました。

やはり、アラブとトルコは民族的に違うという意識があり、近代西欧との取り組み方にも違いがあります。それからイスラムとの距

離の取り方も若干違うところがあり、それは国際政策その他にもどこかで表れているところがあると思います。ただ、近年イスラム主義的潮流が非常に有力になってきていることもあって、アラブ圏では、トルコはアラブ人が言えないことを言ってくれる存在としてむしろプラスに評価されています。

カイロ大学の日本学科の先生に言わせると、今日のエジプトではトルコはアラブ人よりアラブ的だと言って褒めている人もいるそうですが、この感覚は、半分オスマン人である立場からは甚だ違和感があって、アラブ人より「アラブ的」なのではなくて、アラブ人より「イスラム的」だと言えと言えるかもしれません。

問　ドイツではヒトラーが権力をとった後、ホロコーストが始まります。何千何万という人が海外に逃げました。どの国も哀れなユダヤ人難民を受け入れようとしなかった中で、トルコがアメリカを除いて唯一門戸を開放して、特に科学者を非常に多く受け入れて、その結果、トルコの教育と科学、芸術が非常に発展したといいます。それがなぜ日本ではできなかったのでしょうか。もちろん杉原千畝さんのように、手書きのビザを発給して多くの難民の命を救い、イスラエルから表彰された方もいるわけですが。

鈴木　そもそも、オスマン帝国と大日本帝国では成り立ちが違いまして、大日本帝国は自称帝国で、実態は国民国家でした。これに対し、オスマン帝国は本当の世界帝国でした。立ち上げたのはトルコ系のムスリムでしたが、あらゆる母語、あらゆる民族に属する人間のるつぼでした。非ムスリムに対する差別はあるものの、しかし不平等の下ではあっても宗教・宗派の違う人間が許容されて中にいる世界です。

他方、日本は極東の端にある島国で、ヒトの出入りがほとんどありません。ヒトの出入りがない世界と、三大陸のつなぎ目に広がっている国とでは、国柄がそもそも違っています。しかも、オスマン帝国は、作りがイスラム的世界帝国で、イスラム帝国というのは多様性を同化せず、異質のものを異質として保存しながら、バランスをとって上に乗るシステムです。ですから、アイデンティティーの基礎として宗教が言語と民族に優越する。そうすると、言語と民族性を保存することに余り熱意を持っていませんので、国語も、唯一の公用語もありません。一番重要な公用語は、スルタンの母語であるトルコ語ですが、南半ではアラビア語が決定的に重要です。北半でも、場合によると、スルタンの勅令をアルメニア語とかギリシア語で書くこともあるのです。

日本のように限りなく文化的に同一性が強い、つまり一五〇〇年間同じ王朝がほぼ同じ領域を支配していた国では、殆ど全員が同じ言語を話し同じ文化を持っていると信じられているわけです。津軽弁も印欧系のインドの諸語で言えば別の言語になるでしょう。しかし、鹿児島弁も津軽弁も同じ日本語の方言だと言っている。方言だという認識が共用されていれば方言なのです。別の言語だと言い出すと、別言語になる。

マケドニア語の例があります。マケドニア語という民族語があるとは、一九世紀半ばまで誰も信じていませんでした。誰かがあると言い出したことによって、存在することになってしまいました。その例にも見られるように、非常に柔構造の世界です。

日本では多文化共生社会などと言いますが、ノウハウがほとんどないわけです。実態も何も知らないまま、口で言っているだけです。イスラム圏の支配者たちこそ、多文化共生社会の専門家です。

オスマン帝国の場合はとりわけ多文化的であり、ユダヤ人の問題にも長い経験があったのです。そもそも、一五世紀後半、イベリア半島でのレコンキスタが進み、イベリア半島のユダヤ教徒たちの居場所がなくなったときに、セファルディムたちを受け入れたのは、一方では対岸の北アフリカのマグリブで、もう一方はオスマン朝でした。オスマン朝で大量に受け入れて、しかもビザンツ時代以来のユダヤ教徒がいたのに対して、新しいネットワークと技術を持って入ってきた彼らは、むしろ主導権を握っていきました。したがって、オスマン帝国時代、ユダヤ教徒と言うと、アラビア語を母語とするアラブ圏に土着したユダヤ教徒か、そうでなければ、ラディーノをしゃべるセファルディム系という具合になっておりました。もっとも、ハンガリーもオスマン領であった頃は、イディッシュを母語とするアシュケナーゼもおりました。こうしたなかで、おそらく、ナチス時代に渡来した際にもユダヤ教徒のネットワークは生きていたと思われます。

ナチスを逃れてユダヤ人たちが亡命先を求めていた時期は、共和国のトルコ革命が本格的になって改革が進んでいる時代で、人材が足りなかった頃でした。そのときに、ナチス・ドイツから第一級の技術、知識を持った人材が流れ込んできました。改革の主導者であるムスタファ・ケマル・パシャは、ムスリムではありますけれども、非常に世俗的な面を強調する方だったので、これらの人材を使わない手はないというので、どんどん受け入れます。その中には、多くのユダヤ系の人もおりました。特にアンカラ大学は、大量にドイツから逃れてきた亡命者の知識人をスタッフとして採用しております。こういうドイツから来た方々の中には有名な方がたくさんおりまして、例えば比較文学の古典、『ミメーシス』の著者であるアウエルバッハは、イスタンブル大学のロマンス語の文献学者として迎えられて、教授を務めていらっしゃいました。

それから、ブルーノ・タウトは、日本に来て定職を得たいと思いましたが叶わず、トルコに来ました。トルコで早速国立のアカデミーの、アカデミーと言っても高等専門学校ですが、高等専門学校のテニュアつきの教授に任用され、アタテュルクの死去後は、アタテュルク廟の建設委員会の委員にも選ばれ、その後に客死しています。ドイツから戦間期に移ってきたドイツの知識人については、ドイツで学位論文が本になって出ており、詳しいことが書かれております。

つまり日本とトルコでは国柄が全く違うのです。トルコは異文化の人々を受け入れて、これを有効活用する伝統がある社会でした。

しかもそれが変動期にあって人材が求められていた時代だったのです。これが、一八世紀のオスマン朝であればやや難しいかもしれませんが、それでもフランスの軍人で変わった方がいました。フランス王とけんかをして、優秀なのでハプスブルクに仕えて任用され、ここでもけんかをして、居場所がなくなり、オスマン帝国に逃げてきて、追手がかかったところでイスラムに改宗し、オスマン朝の砲兵改革をやって、総督待遇のパシャになった人がいたのです。一八世紀のことです。繰り返しますが、国柄が全く違うのです。トルコは多文化共生社会で、多文化のバックグラウンドを持った人間の能力を活用するノウハウのある世界です。

日本にはそういったノウハウがないのに、あるつもりでいるのは非常に問題だと思います。日本において杉原さんの御功績が大きいことは否定できませんが、ユダヤ人に対して通過の鍵を開けて差し上げたに過ぎず、あとは野となれになったわけです。しかし、トルコでは入国させて、職業もきちんと提供しているのです。

ですから、オスマン帝国やトルコ共和国に学ぶ値打ちは十分あると思います。トルコ共和国は、トルコ民族国家としての国民国家に近い形にはなりましたけれども、ただトルコ民族国家とは自称していないのです。アナトリアに住んで、トルコ国籍を持って、トルコ共和国に忠誠心を持って、トルコ語を話す人はトルコ人だと言っているのです。ですから、本当はトルコ人の「民族」意識は非常に柔構造的です。実際上、おばあさんはアルバニア人でおじいさんはアラブ人で、それでもう片一方はトュルクメン人で、一人がアナトリアのトルコ人だという方がおられて、堂々と私はトルコ人ですとおっしゃいます。日本とは全く違います。

その世界を知るには、『ナショナリズムとイスラム的共存』（千倉書房、二〇〇七年）という本を同文館から出しておりますのでお読みいただきたいと思います。『イスラムの家からバベルの塔へ』という題名で一九九三年に出版した旧著に、新しい序文を加えたものです。

問　国際社会の中の日本を考えた場合に、ラテン語を日本人が修めるということについては、どのようにお考えでいらっしゃいますか。

鈴木　ラテン語を基礎にした世界語として、ポーランド人ザメンホフが考案したのがエスペラントですが、日本ではエスペラント運動が戦前から盛んで、国史学の大家の黒板勝美先生がエスペラント協会の会長もなさっていたようですが、やはり普及するのはなかなか難しいように思います。

ヨーロッパの場合は、ローマ帝国があって、その公用語はラテン語で、しかも教会の基礎言語もラテン語でしたが、ローマ帝国は東西に割れて、東ではラテン語は力を失ってしまいます。ギリシア語が主要な公用語になって、西ローマ帝国を失った東ローマ帝国は、西半分のないローマ帝国となりました。それをビザンツ帝国と呼んだらよいと私は思うのですが、そこはギリシア語世界になってしまいます。しかし、西ローマ帝国が滅んだ後、ローマの遺産を、カト

リック教会を通じて、信仰のみならず知識・技術、特に文字技術を受け継いだのが西欧世界で、そこの共通基礎語になったのでラテン語が大きな意味を持っているのです。ラテン語が通用する世界というのは西欧圏だけです。

東欧正教世界では、すでにラテン語は力を失っており、アラビア文字世界では、一九世紀の後半から非常に西洋化したムスリム・トルコ系エリートが出てきました。その当時、子供にラテン語を学ばせたということはありましたが、それは西欧において教養だからというので学ばせたので、ほとんど一般には普及しておりません。梵字圏、漢字圏では言うまでもなく、ラテン語というのはローマ史家・中世史家や西洋古典学者など専門家か非常に特殊なカトリックに熱心な方ぐらいしか扱わないのではないのでしょうか。

ラテン語を学ぶと、古典のなんたるかを知るのには役立つと思います。古典・古代を学ぶことの利点は、文明が始まってから滅ぶまで全部を見られることだとトインビーは言っています。しかも、ギリシア語・ラテン語だと大した量はないので、大学四年間でその気になれば全古典を読める。大文明が生まれてから死ぬまで全部を、しかも本人たちの声を通じて知ることができ、そしてそれを参照すれば、現在自分がいる世界の位置づけも、第三の世界の位置づけもできると言っています。そういう意味では古典語としてのラテン語を学ぶのは非常によろしいと思います。外交の場などで、西欧的教養の深さをそれとなく示せます。

中国のいる東アジア世界は、ローマ帝国が生きている地中海世界だと考えることができるかもしれません。四〇〇〇年にわたって生き続けて、今また雌伏していた臥龍が昇龍となろうとしております。生まれて四〇〇〇年たって、まだ元気なのです。ですから、中国文明については生まれてから死ぬまでを見ることができないのです。すなわち漢文を読んでも、一つの文明の興亡を全て知ることはできません。

確かにギリシア語やラテン語を学ぶことは、ヘラスの世界の全行程、それからローマ帝国の全行程を自分で本人たちの言葉を手がかりにして歩けるという点では、非常に有益です。日本人はそういう手がかりを持っていないので、比較文明史が書きにくいのだろうと存じます。ラテン語にはそういった効用はあると思います。

しかし、実際問題として、日本では、余程特殊なエリート的興味を持った方以外には余り役に立たないだろうと思います。それよりは漢文ができたほうがずっと意味があるように思われます。

問　一八五六年のトルコのパリ講和条約参入によって、トルコはヨーロッパに加わったといえるのでしょうか。

鈴木　一八五六年、つまり一八五三年からのクリミア戦争終結の際のパリ講和会議によって、トルコが西欧近代国際社会に参入したというのは誤りです。というのも、むしろ異文化世界としてのオスマン朝とのかかわりも前提にしながら、西欧の国家体系ができ上がっていったからです。西欧世界が西欧らしくなる前から、ヴェネツィア

がそもそもイスタンブルに在外公館を置いておりますし、パリ講和会議へのオスマン帝国の参加は、コンサート・オブ・ユーロープのメンバーになったと捉えるべきだと存じます。つまり、西欧のコア部分の幹部会に入れてもらえたという意味であって、そもそもヨーロッパ側では、中世末以来トルコをシステムに不可欠の一員として見ていました。そうでなければ、ヴァロア朝のフランソワ一世がカール五世に対抗するために、オスマン朝に救いを求めたりはしないわけです。

ですから、外交関係としては非常に古い歴史がある。ところがヨーロッパがだんだん強力になってきて、お友達社会をつくるようになって、トルコはお友達社会のコア部分からはじき出されていました。オスマン帝国はパリ講和会議で初めて正式の代表として招待されたので、ヨーロッパが自分たちでつくり出して固まりかけていたコアの部分、コンサート・オブ・ユーロープの一員として認めたと見たらよろしいように思います。

問　時事新報社発行の『時事年鑑』大正一二年版によれば、一九二一年、トルコに日本の出先事務所のようなものが開設されたとあります。また、外務省発行の『日本外交年表竝主要文書一八四〇―一九四五』（日本国際連合協会、一九五五年）によれば、その事務所に駐トルコ日本外交代表者として特命全権公使が着任しておりますが、これは何のことですか。

鈴木　それは戦後処理のための特命全権大使で、ベルサイユ条約のときに送られた特命全権大使に似た性格のものです。国家としてのオスマン帝国へ、日本の代表として送られたものとは違うようです。ですから、国交ではない。戦後処理の特任大使として派遣されていたということだと思います。

問　トルコは世界一政教分離が徹底していると言われます。しかし、その国旗には、オスマントルコ以来のイスラム教の象徴である三日月が示されております。ケマル・パシャの改革はイスラム式なのか、それとも無宗教式なのか、どちらだとお考えになりますか。

鈴木　イスラムからの規制緩和が必要だというような流れは、一九世紀の後半からずっと流れていまして、ムスタファ・ケマル・パシャの場合は、それをかなり徹底的に行いました。当初共和国憲法にはイスラム国教条項があったのですが、一九二八年に憲法を改正して、国教条項を削除し、逆に信仰の自由条項を挿入しました。その狙いは、イスラムの否定ではなく、内面の信仰としてのイスラムは大いに結構であるけれども、近代的なシステムとの間でいろいろと齟齬が生ずるので、少なくとも政治体制や法制への影響を規制緩和していこうという方向でした。

しかし無神論ではありません。ムスタファ・ケマル・パシャもムスリムではあるのです。ただ内面の信仰を重視しているということで、中世ヨーロッパのカソリックと近現代のフランスのカソリックのような違いがあると思います。

問　日露戦争、つまり一九〇四、五年のことですが、ウィーンの牧野

伸顕公使がウィーンの一書記官をトルコに派遣して、イスタンブルに日本事務所を開き、黒海艦隊の動静を調べていたと理解しています。当時はもちろんお話のように、大使館でも公使館でもありません。もちろん領事館でもなかったかと思いますけれども、何という名前で設けられていたのか、その辺をもし御存じでしたら教えていただければと思います。

鈴木　きょう外交史料館の目録を拝見していましたら、「土京「コンスタンチノープル」ニ派駐ノ目的ヲ以テ在墺帝国大使館書記官増員一件」というファイルを見つけました。まだそれを読むに至っておりません。ただ、公式の在外公館ではない形で派遣して、事実上イスタンブルに駐在しているという形であったはずです。ですから、トルコ政府としては、入国は認めているけれども、公式の何かの組織としては関知していなかったのではないかと思います。

ただ、その前にも後にも、イスタンブルに武官が一定期間滞在していたことはあったようです。そのあたりの詳しい研究はまだ十分なされていないので、もし御関心があったら、ぜひ国際法の見地から、日露戦争をめぐる在外諜報網の形成を御研究いただいて、我々に教えていただければありがたいと思います。

問　先ほどのお話にもありましたが、中国は紀元前五〇〇〇年来の文明がそのまま現在発展しています。そしてオスマン帝国、昔をたどれば匈奴トルコ系民族が中国にとって最大の脅威だった時期が何千年とありました。それも踏まえて、トルコと中国のこれまでの相互関係、相互認識、それから外交ネットワークがどんなものだったかにつき、御見識をお聞かせください。

鈴木　中国とはオスマン朝時代を通じて間遠でして、一六世紀にカタイと呼ばれる人々が来ていると伝えられていますが、どういう人かよくわからないところがありまして、人的交流は皆無ではないにしろ、しっかりした密接な直接の関係は実際上ありませんでした。交易も、直接ではなく間接的なものが中心であったのではないかと思われます。

清朝の末でも、清朝そのものと外交関係がないにもかかわらず、新疆で旗揚げしたヤークブ・ベクとは非常に近い関係がありまして、軍事顧問団をアブドゥル・アズィーズという、第三二代のスルタンが送っています。しかもヤークブ・ベクが亡くなった後、左宗棠に鎮圧されますが、トルコにはヤークブ・ベクの子孫が亡命しています。しかし、中国本土との関係は非常に間遠で、中国について書かれたものも非常に少ないのです。版本が出始めてからオスマン朝が滅びるまでに、中国そのものについて書かれたものというのは非常に少なく、一番ボリュームがあるものとして、ジュール・ベルヌの *Les Tribulations d'un Chinois en Chine* という小説がフランス版のもとのグラービュール入りのオスマン語訳が出ている程度です。トルコ側では中国については関心も非常に薄いし、情報も少ないように思います。

日本でも古い時代には、水戸学の会沢正志斎が『新論』で、かつ

てトルコというのがあって、非常に威勢を奮ったけれども、今は非常に衰亡状態にあるというのを二行ぐらい書いているぐらいでして、そういう関心で、意外に中国とトルコの間の直接のイメージの交換というようなものはないように存じます。

トルコの場合、中央アジアとの絆が非常に深いようでして、その点では新疆のウイグル系のムスリムとの交流は非常に深いものがあるようです。行ったり来たりしているところがあるようです。

司会　そろそろお時間となりましたので、これをもちまして講演会を終了させていただきます。

（平成二六年七月一一日、於外交史料館講堂）